# 病気であっても、病人ではない

**樋野興夫著　いい覚悟で生きるより**

自分の境遇を固定して、限られた視界から物事を見るよりも、
俯瞰的な視点から気がつくことは多いはずです。

「みなさん、人生を生きていますか?」

がん哲学外来の日、私が別室での個人面談を終えてから、患者さんたちが集うカフェスペースに行って声をかける挨拶です。

「先生、私たちはみな病人ですよぉ! がん人生ですよ」

明るい笑い声が広がります。

「いいえ、みなさんは病気であっても、病人ではありません。今たまたま、がんという病気になっているだけで、ご自身であることに変わりはないですよ」

そう言うと、「ああ、そうか」「確かにそうですね、病人じゃなくて病気なだけ!」 「まさに目からウロコ、です」などの声が上がります。

ここが痛いとか、眠れないとか、治療の効果がなかったらどうしようとか、 近視眼的な状態に常に人生を支配されているのが病人だとしたら、誰も病人ではいたくないと思いませんか。

病気で悩んでいる人は、往々にして、車の運転席のような限られた視界から 世界を見て、それが世界のすべてだと考えてしまいがちです。つまり、「病人」という席に座ってそこから見える道を進んでいるのですね。でも、その道はまっすぐなのか、途中で分かれ道があるのか、直前までわからないのではありませんか。だから、検査の数値や診断結果といった自分ではコントロールできないものが、突然目の前に現れたように感じてあわててしまうのです。

その視線をぐんと広げて、空から下界を見てみましょう。俯瞰で見ると、今病気である自分が進んでいる道の様子や行き先を見晴らす気持ちになりませんか。そして、今抱えている悩みが、案外と小さなものだと気がつくこともあるでしょう。病人という境遇から離れて広い世界を見ることは、物事の本質を見きわめる視点を持つことです。それは自分自身を取り戻すきっかけになります。

私は折にふれ、聖書をひもといています。聖書は、まさに上空から下界を見るような視点そのものです。マタイによる福音書24章6節に、次のような文章があります。

「また、戦争のことや戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません」

こじつけと言われるかもしれませんが、風貌を見て、心まで読む病理学者の性、私はこの「戦争」を「がん」に言い換えてみるのです。

「がんの情報やがんのうわさを聞くだろうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。いつかがんは発病するでしょう。しかし、終わりが来たのではありません」

うわさを聞いた時点であわてないようにしなさい、というのは、すべての人に当てはまります。「こうすればがんにならない」「がんにはこんな食材が効く」「がんとは闘うな」といった記事や広告を見ない日はありません。目新しい情報を見るたびに右往左往している人が多いのではありませんか。あわてて、あれこれ予防をしたところで、がんになるときはなるものです。そのとき、病人の人生に甘んじてしまうのか、自分の人生を見失わないでいられるのか。その差は大きいのではないでしょうか。

そう、たとえがんになったからといって、すべての終わりではありません。人間は、自分では希望のない状況だと思ったとしても、自分の生をどう生きるかと深く考える学びの時が与えられています。がんになったことでそのことに気づき、気持ちに少し余裕が持てたとき、人は初めて希望が持てるのです。病気であっても、病人ではない人生を生きられる社会の構築は、私とがん哲学外来の偉大なるお節介としての使命だと